

インドネシア出張報告

小林寧子

年度末の2010年3月21日から30日まで、インドネシアへふたつの目的を持って出張した。ひとつは、国内最大の宗教社会団体ナフダトゥル・ウラマー (Nahdlatul Ulama: ウラマーの覚醒, 以下 NU) の全国大会 (スラウェシ島マカッサル市で開催) に参加 (傍聴) することと、もうひとつは、二日ほどジャカルタの国立図書館で資料収集 (戦前のイスラーム系雑誌の閲覧) を行うことであった。ここでは前者を中心に述べたい。

NUは、実は国内のみならず世界最大のイスラーム団体である。会員の登録簿もなく組織活動はきわめて緩慢であるが、この団体に帰属意識をもったり親近感を抱く人は多い。近年のサーヴェイでも、全国では約4千万人が自分は何となくNUの一員と思っているという結果が出る。1926年1月にスラバヤで結成され、今でも東部ジャワが強力な地盤ではあるが、全国に支部がある。

1970年代から全国大会は5年に一度開催されており、大きな注目を集める。というのも、日頃大した活動もしないために、そこにNUの性格、抱えている問題が凝縮されて現れるからである。大会は5日間にわたって開かれたが、大きくわけてプログラムはふたつである。ひとつは中央執行部選挙でメディアの関心もこれに集中した。NUは二重指導体制をとっており、執行部はシュリア (Syuriah: イスラーム法学委員会) とタンフィズィア (Tanfidziah: 執行委員会) である。シュリアは碩学のウラマーから構成され、タンフィズィアは実務派がメンバーとなる。シュリア長はライス・アム (Rais 'Am: 総裁)、タンフィズィア長はクトゥア・ウムム (Ketua Umum: 議長) で、シュリアが格上であり、ライス・アムがNUの最高指導者と位置づけられる。

もうひとつのプログラムは、法学検討 (Bahtsul Masa'il, 以下 BM) であり、各分科会に分かれて活発な議論が行われる。古典文献を参照し、現代社会の状況を考慮しながら、個別の具体的な問題にイスラーム法の見地から対処法を検討する。ウラマーの神髄が発揮される場である。NUの最も重要な活動はこの法学検討で、これは村、郡、県、州というレベルだけでなくいろいろな機会に行われる。全国大会のBMは最終議論ということなり、NUを代表する見解がここで採択される。ムスリムの行動の指針となるイスラーム法が実体法として示されることになるが、面白いことにこの最終見解は成員を拘束しない。その見解を受け入れるか否かは個々のムスリムに委ねられる。頑として持論を変えないウラマーもいる。先ほどNUは大した活動をしていない

と述べたが、実はNUというのは大法学検討フォーラムとでもいうべき集団で、個々のウラマーの影響下にある人々が集う「コミュニタス」と呼ぶのが相応しい。残念ながらこの全国大会を見るだけでは法学議論がどういう状況にあるのかを判断することはできない。しかし、何が問題にされているのか、どの分科会に人が集まるのかなどを見ると、従来の法学検討分野はいささか活力を欠いている印象を受けた。

執行部選挙は緊迫した雰囲気で行われた。総裁はNUの「伝統」では民主的投票と言うよりも話し合いで決まることが望ましいと考えられており、今回もその可能性が高いのではないかと推測された。政治的活動に野心をもつ現議長が総裁の座を狙い、現総裁との一騎打ちの様相を呈していたからである。いまだかつてない事態が起きたのである。長老ウラマーによる事前協議は失敗し、いきなり候補者指名の投票となり、緊張が走った。各州・県支部、および海外支部の代表が投票するが、投票から開票終了まではおよそ四時間半かかった。果たせるかな、現総裁が過半数の指名を獲得し、会場外のTV中継を見ていた聴衆から「アッラー・アクバル！」がこだました。これでは本選挙を行っても結果は同じだが、と思っていたら、選挙管理委員長から指名票獲得2位の候補者（現議長）から「立候補辞退」の申し出があったことが告げられた。会場には安堵の空気が流れた。

続く議長選はややリラックスしたムードで行われた。立候補者が7人もいたし、議長選は今までも投票獲得数だけで決定されてきたからである。選出されたのは、「最有力」と報道されていた候補者ではなかった。ただ、総裁、議長とも学問の高いウラマーとして定評があり、NUの「伝統」というかアイデンティティが再確認された形となった。世俗選挙並みのキャンペーンや「マネー・ポリティクス」が批判され、莫大な費用が投入された全国大会であった。しかし、閉会式はしっとりとした雰囲気で行われ、夜の九時半から始まった。再選された総裁は地味でいかにもジャワの農村部に住んでいるようなウラマーである。政治的な発言は一切なく、「BMが進歩しなければNUは発展しない」と、ウラマーとしての関心を明言した。

NUは常々国内政治との関わりで議論されてきた。しかし、今回の全国大会で見たのは、「価値観」を共有する集団、Keluarga Besar（大家族）とでも言うべき有り様である。雑然として締りがなく、寛容度が高い団体であることを再認識した。グローバル化の中で、成員がこの団体にこれほど愛着やアイデンティティを示すことは興味深い。しかも、今回は実践政治への積極関与をめざす動きが拒まれ、それと同時に名目上の全国展開からジャワ島以外の地域へ根を下ろし始めている実質が感じられた。インドネシアの一体性を強めるとともに、広いイスラーム世界へつながる団体としての自負を見せた。

NUは、インドネシア的イスラームのあり方、つまり「イスラームの多元主義」を標榜し、それを世界に発信していこうとしている。インドネシア民主主義を支える市

民社会の要塞でもある。大会の日程がなかなか定まらず、しかも大会中も予定がよく変わるなどして私のような初心者は右往左往したが、その深い懐にたっぷりと浸かった5日間であった。



会場周辺では執行部選挙の候補者の宣伝が立ち並んだ



法学討論の会場



全体会の会場



NU 全国大学を見学した海外からの研究者